

飲墨について

澤 田 雅 弘

はじめに

南朝宋の劉邕の嗜好品は、瘡痂であった。明の僧泐季潭は糞中の芝麻、趙輝は女人の陰津月水、秦力強は胎衣、劉俊は蚯蚓であった（明・陸容『菽園雜記』卷四）。かれらの嗜好はいずれ劣らぬ特異なものであったが、特異にすぎてどの嗜好も流行することがなかった。本稿でいう飲墨、すなわち墨汁を飲む嗜好も風變わりではあるが、それらとは類を分け、一個人の嗜好に止まらない。ただし、飲墨の嗜好人口は多いとまではいえず、その流行にも盛衰があった様子である。しかし、實際に墨を飲まないまでも、飲墨を提唱するものは跡を絶たず、「飲墨」「胸中の墨」などの語が衆口にのぼるにいった。ここでは管見の記事にもとづき、飲墨の諸相を明かにしつつ、その意味を窺いたい。

飲墨は舐筆と同じでないので、まず兩者の別を明らかにしておく。舐筆とは、筆寫に際し、鋒先を舐めてしごき、筆に墨汁が馴染みやすくする行爲で、すでに『莊子』外篇田子方に「宋の元君將に圖を畫かんとす。衆史皆至り、揖を受けて立ち、筆を舐めて墨に和す」とみえる。筆を舐める行爲は、別に吮毫・吮墨などともいった。「上（康熙帝）其（沈荃）の筆の禿げたるを見て、鳳管一を取り、親ら毫を吮りて以て公に授く」（馬宗霍『書林紀事』引）、「惜しいかな簡籍遺落し、舊事十に三四も無し、墨を吮りて翰を揮ひ、慊然とする所有り」（『舊唐書』宣宗紀論）のとおりである。また、

後漢・趙壹の「非草書」には「夫れ杜・崔・張子は、皆超俗絶世の才有り、博學の餘暇に、手を斯に遊ばず。後世焉を慕い、専ら用て務と爲し、鑽れば堅く仰げば高く、其の罷勞を忘れ、夕に惕んで息まず、仄すれど食するに暇あらず。十日に一筆、月に數丸の墨、領袖阜の如く、唇齒常に黒し」という一段がある。草書の名家杜度・崔瑗・張芝を慕うものたちが、草書の研鑽に明け暮れる愚行を揶揄するのであるから、「領袖阜の如く、唇齒常に黒し」も舐筆のせいで、飲墨の結果とみては唐突の感を免がれない。ちなみに、後世には舐筆結果と解した用例「揚雄は賜を受けて石室に書を觀、王肅は靈に通じて東齋に易に注す。故に領袖阜の如く、唇齒皆黒き有り」（北宋・吳淑「墨譜」）がある。これら舐筆行爲も、新品の筆で無い限り、結果的に微量の墨が口に入るが、飲墨とは飲む量も異なる。

南北朝の飲墨

飲墨がいつ頃から行われたか、明らかでないが、晚くとも南北朝にまでは遡る。すなわち『隋書』には、北齊の朝賀および秀才の策問に關する次の記事がある。

- ・（後齊）正會日、侍中黃門宣詔、勞諸郡上計。勞訖付紙、遣陳土宜。字有脫誤者、呼起席後立。書迹濫劣者、飲墨水一升。文理孟浪、無可取者、奪容刀及席。（志・禮儀四）
- ・後齊每策秀孝、中書策秀才、集書策考貢士、考功郎中策廉良。皇帝常服乘輿出、坐於朝堂中楹。秀孝各以班草對。其有脫誤・書濫・孟浪者、起立席後、飲墨水、脫容刀。（同右）

元旦に地方長官が朝廷に參内して會計報告をし、朝廷はかれらを勞った後、各治所の産物について書かせる。その際、誤字脱字があつたものは起立させ、字が拙劣であれば墨汁一升を飲ませた、というのである。この件は、唐・韓鄂『歲華紀麗』卷一「飲墨」、および北宋・蘇易簡『文房四譜』卷五墨譜第四引の北宋・劉溫叟等撰『開寶通禮』にもみえる。

ただし、前者においては字句に異同があるだけであるが、^①後者では、誤字脱字も書迹濫劣の場合と同様、飲墨一升の罰を受けたことになっている。^②

一方、秀才の策問時にも、誤字脱字があるもの、字が拙劣なもの、文理が要領を得ないものに、ひとしく墨汁一升を飲ませ、座席・佩刀を奪ったという。ただし、『通典』『通志』『文獻通考』各書には、次のようにみえ、

北齊選舉、多沿後魏之制、凡州縣皆置中正。其課試之法、中書策秀才、集書策貢士、考功郎中策廉良。天子常服乘輿出、坐於朝堂中楹。秀孝各以班草對。字有脱誤者、呼起立席後。書有濫劣者、飲墨水一升。文理孟浪者、奪席脱容刀。

墨汁一升の罰の対象者は、朝賀時の罰同様、字が拙劣なものだけになっている。なお、この飲墨の罰は、南朝梁でも行われたふしがある。正史にはみえないが、元・隱時夫『韻府群玉』に、

梁試進士不中程者、飲以墨水一斗。(卷二〇)

とみえるほか、清にも次のように傳える記事がある。

梁武帝時舉秀才、謬者罰飲墨汁一斗。(魏崧『壹是紀始』卷二〇)

梁試進士不中程者、飲墨水一斗。(清・褚人穫『堅瓠續集』卷一「飲墨」)

北齊における秀才試験制度と南朝との關係については、

北齊令中書策秀才、濫劣者、有罰墨汁之例。南朝亦重此科。(清・趙翼『陔餘叢考』卷二八「秀才」)

と指摘されるほか、天子みずから朝堂に望む嚴重な試験體制が、「直接的には梁制の學館試験制度から刺戟を受けているらしく思われ」(宮崎市定『九品官人法の研究—科擧前史—』P.51)ることを考慮すれば、試験における北齊の飲墨一斗の罰は、梁でも行われていた可能性があろう。

また、『隋書』正會曰云々に「奪容刀及席」とみえる「奪席」も、『東觀漢記』の「戴憑」の條に、

正旦朝賀、百僚畢會、上令群臣能說經者更相難詰、義有不通、輒奪其席、以益通者。憑遂重坐五十餘席。故京師爲之語曰、解經不窮戴侍中。^③（卷十六）

ともみえるように、北齊に始まる罰でない。右は、戴憑が經義に精通したと伝えるのを旨とする記事であるから、後漢の朝賀での罰が奪席だけでなかった可能性も高く、飲墨罰の濫觴は、北齊をさらに遡るように思われる。

唐・宋の飲墨

北齊の飲墨罰以降、飲墨を明記する記事は、管見の限り、宋・范鎮が伝える唐代科擧の記事を待たなければならぬ。禮部貢院試進士日、設香案於堦前、主司與擧人對拜、此唐故事也。所坐設位供帳甚盛、有司具茶湯飲漿。至試學究、則悉徹帳幕・氈席之類、亦無茶湯。渴則飲硯水、人人皆黔其吻。非故欲困之、乃防氈幕及供應人私傳所試經義。蓋嘗有敗者、故事爲之防。……（『東齋記事』卷一）

唐の明經科のうち、受験者が多い學究一經の試験會場では、不正行爲の防止に帳幕・氈席の類を撤去し、茶も用意しなかつた。ために受験者は、のどの渴きを硯水を硯水すなわち墨汁で潤した、というのである。

これに次ぐ飲墨記事者は蘇軾で、次のように記している。

眞松煤遠煙、自有龍麝氣。「初不假一物也。」世之嗜者、如滕達道・蘇浩然・呂行甫、暇日晴暖、研墨水數合、弄筆之餘、乃啜飲之。蔡君謨嗜茶、老病不能飲。但把玩而已。看茶啜墨亦事之可笑者也」（蘇軾『仇池筆記』卷上「看茶啜

墨」、また『稗海』本『東坡志林』卷一〇「又書茶與墨」）

滕達道・蘇浩然・呂行甫の三人は、筆を揮ったあとの残り墨を啜って飲んだとあり、後文には、飲茶を好みながら飲茶

できなくなったため、茶を手に乗せて眺めていた蔡襄の「看茶」とともに、飲墨行爲を「事の笑うべきなり」と結んでいる。したがって、滕・蘇・呂の飲墨は嗜好以外のなにものでもない。この三人のうち、滕達道（元發）は翰林學士に任用された官人で、墨との関わりをほかに知らないが、蘇浩然（澥）は墨の製造に秀でた文人で、呂行甫（希彦）は墨顛とよばれた墨の鑑藏家であるなど、蘇・呂二人と墨との縁は深い。

墨に特別の愛着を抱いたのは、唐人も同じである。唐に「陳玄」「龍賓」「墨松使者」「松燕督護・玄香太守」など、墨を擬人化した戲稱が多いことがその證である。しかし、墨の鑑藏がいっそう盛んになったのは、文房清玩が深まった北宋以降のことである。^⑤ 北宋における墨愛好の風潮は、

近時、世人好蓄茶與墨、閑暇輒出一物、校勝負云、茶以白爲尙、墨以黑爲勝。……〔稗海〕本『東坡志林』卷一〇
〔書茶與墨〕

といった記事にもよく窺われるほか、墨工李超の名を知らず、下賜された李超墨に不満顔であった大臣が、名工李廷珪の墨と交換してもらい有頂天になったこと^⑥、蘇軾は墨數百挺を收藏し、暇日には試し磨りしていたこと^⑦、李常には墨を見れば掠め取る癖があったこと^⑧、司馬光の唯一の趣味は墨で、藏墨數百に及んだこと^⑨、陆游の先伯祖は李廷珪・張遇の墨以下ことごとく收藏し、晩年にはその中の尤品をベッドにおいて愛護していたこと^⑩、當時、墨の製造に手を染める士人も多かったこと等々、いずれも當時の愛墨の風を傳えてあまりある。次は、やはり愛墨家であった文彦博がかかわる軼事である。

・姜潛、字至之、兗州人。隱居奉符之太平鎮。文潞公（彦博）通判州事日訪墨於姜。姜曰、近頗難得、當求佳煤自製。久之携紙囊訪公曰、此卽煤也。瀉之則盈盤、按之則如故。又曰、此亦可以如茶啜之、無害。公如其言、啜一

茶甌。食頃忽發欸聲、香氣上襲、芳馥如射。姜曰、此所謂射煤也。（元・陸友『墨史』卷中）

・西洛王迪、隱君子也。其墨法止用遠烟・鹿膠二物、銑澤出陳瞻之右。文潞公（彦博）嘗從迪求墨。久之、持烟一奩見公、且請以指按烟。指起、烟亦隨起。曰、此烟之最輕遠者。乃抄烟以湯淪、起揖公對啜。云當自有龍麝氣。眞烟香也。……（宋・何遠『春渚紀聞』卷八記墨「烟香自有龍麝氣」）

前者には、文彦博が佳墨の入手を相談していた姜潛から最上級の煤を渡され、姜に言われるままに、茶碗に注いで飲んだとあり、後者では、文彦博に佳墨の手配を頼まれていた王迪が、超微粒の煤を湯に浸して啜るよう進めたとある。ともに飲んだのは製墨用の最上級の煤であるが、煤が墨の主要成分である以上、飲墨と區別する要はないであろう。

このように、宋では嗜好としての飲墨例が認められ、その飲墨は墨に對する愛着と深く関わっていた。しかしその後は、明末清初の頃まで、時代を特定できる飲墨記事をみない。⁽¹²⁾

明末清初の飲墨

明末の製墨界は、萬曆を頂點に空前の繁榮をみ、羅小華・程君房・方于魯ら名工が輩出した。編著でも『程氏墨譜』『方氏墨譜』などの名譜をはじめ、潘膺祉『如韋館墨評』、方瑞生『墨海』、麻三衡『墨志』、萬壽祺『墨表』、張仁熙『雪堂墨品』、宋肇『漫堂墨品』などが陸續と世に出、墨の收藏でも邢侗・周亮工・宋肇ら名家が輩出した。また、次の一文からも察せられるように、明末清初の墨の愛玩は、雅文化を模倣する俗社會にも広がっていた。

今時玩墨不磨墨、看墨不試墨、錦囊漆匣、羊質虎皮。俗人不識其爲白爲黑、良可發笑。此新都程于止語、眞中今日墨弊。（周亮工『因樹屋書影』卷七）

飲墨嗜好の記事がふたたび現れるのも、こうした墨をめぐる活況と期を一にする。次は、周亮工の順治一六年（一六五九）の「墨（四憶の一）」詩である。⁽¹³⁾

小閣年年拜、險糜夙所親。心期玄自守、畏見爾磨人。卽啜難娛老、雖多未寫貧。豹囊閒挂壁、靜者剩爲隣。「雙注：墨。予歲時爲祭墨之會、同人咸有詩。」（『賴古堂集』卷五「長安舊傳十賣詩。僕賣不止十、然皆非所憶。憶惟四、作四憶」詩の第二首）

同時の吳偉業にも、周亮工の飲墨に及んだ詩があり、

山齋清玩富琳瑯、似璧如圭萬墨莊。口啜飲同高士癖、頭濡書類酒人狂。……（『吳梅村全集』卷六「周樸園有墨癖、嘗蓄墨萬種、歲除以酒澆之、作祭墨詩。友人王紫崖話其事、漫賦二律」第二首）

と詠んでいる。ただし、この詩は材を友人王紫崖の話にとったものであるから、周亮工の飲墨が事實であるかどうか、なお明らかではない。しかし周亮工は、吳偉業の詩の題に「墨萬種を蓄ふ」というように、墨の一大鑑藏家であったほか、先の周詩の雙注や吳詩の題にもみえるように、年末に祭墨會を主催するなど、墨の偏執的愛好者としても知られた。加えて周亮工には、明末・李日華『紫桃軒雜綴』卷一の飲墨論や、宋の滕・蘇・呂三者の飲墨、および北齊の飲墨一升罰の故事を引いて提唱する、次の飲墨論もある。

李君實（日華）常言、精墨乃松液所成、又經化煉輕升、滓濁盡去、如膏如露。濡毫之餘、閒用吮吸、靈奇之氣、透入竅穴、久久自然變易骨節、澄鍊神明。謂之墨仙。非虛語也。世謂耽書畫者必壽、此理也耶。予戲謂、鞠通嗜墨屑、遂能妙合琴理、愈人聾聵、此必服食之一種。滕達道・蘇浩然・呂行甫、皆好啜墨水、不徒作韻、正欲得仙。北齊策秀才、下者飲墨水一升、非徒罰其濫劣、正欲藉此妙藥、豁其靈心耳。（『因樹屋書影』卷一）

戲言であるにしても、飲墨は神明を澄鍊するゆえに、書畫家は長壽であるとの李日華の論を、さらに補強するなども、飲墨を連想させるところではある。

また、周亮工の知人宋荦にも、張仁熙の飲墨に觸れた記事がある。

廣濟張長人仁熙在余齊安署中、每早盥洗、罷輒取古研磨佳墨、就而食之、口常黑。(『西陂類稿』卷四三筠廊偶筆)

張仁熙は毎朝、洗顔後に古硯で佳墨を磨って口にした。これが親友の證言であることも含めて、飲墨記事にはリアリティがある。この張仁熙もまた墨の鑑藏家であった。⁽¹⁵⁾

次は、清初の林雲銘が、自製墨を同好に分贈した際に添えた一文である。

……于是遶工簡器、采率嶺之精烟、運杵營蒸、彈南唐之祕製。式標五種、品待千年。……閒一分貺良友、豈遜銀鎗。

偶爾怡情、遂公同好。卽異日携歸閩海、閑咏清齋、出此數瓣松心、濡毫啜賞、回憶新安父老、豐樂澄川、……。

(『挹奎樓集』卷一〇「墨引」)

將來、郷里に戻ったときには、この數瓣の松心(すなわち墨)を取り出し、筆に含ませ啜って味わいながら、昔を懐かしみたい、といている。が、この記述は、北宋の飲墨記事に比べ観念的で、リアリティの乏しさを免れず、そのことは次の清中期・翟灝の詩にもいえる。

……乍疑伶秉籥、復效雁銜蘆。墨飲三升盡、烽騰一縷孤。……(王端履『重論文齋筆錄』卷一引『無不宜齋稿』五言排律)

詩であるにしても「墨は飲みて三升盡き、(タバコの)烽は騰りて一縷孤なり」の飲墨描寫は観念的で、實景であるかどうか、いたって怪しい。

愛墨の再燃を背景に、明末清初では宋代同様、周亮工・張仁熙らのような偏執的愛墨者による飲墨が行われた可能性があるが、その一方で、宋代に比べ、リアリティに乏しい記事も目につくようになる。實行をとまなわなない漫言、すなわち、文人を標榜するアイテムとして、臺詞「飲墨」を口する風が、この時期廣まりつつあったのではないか。

飲墨と藥効

1、藥効に對する宋人の理解

前掲の「滕達道・蘇浩然・呂行甫の如きは、暇日の晴暖に、墨水數合を研し、弄筆の餘に、乃ち之を啜飲す」（蘇軾）の前文に、「眞松の煤の遠煙には、自ら龍麝の氣あり」とあった。この龍麝の氣のある眞煙については、やはり前掲の『春渚紀聞』にも「當に自ら龍麝の氣有るべし。眞烟の香なり」とあったことが思い起こされよう。『春渚紀聞』では、王迪が湯に浸して啜ったのが「龍麝の氣」のある眞煙、すなわち蘇軾のいう眞松の煤であった。この龍麝の氣のある松煤については、蘇軾は別に次のようにもいっている。

徂徠珠子煤、自然有龍麝氣。以水調勻、以刀圭服、能已鬲氣除痰。飲專用此一味。阿膠和之、擣數萬杵、即爲妙墨。不俟餘法也。陳公弼在汶上作此墨、謂之黑龍髓。後人盜用其名、非也。（『東坡題跋』卷五「書徂徠煤墨」）

つまり、山東省徂徠山の松煙には龍麝の氣があり、水と混ぜて服用すれば痰の除去薬に、阿膠と混ぜれば佳墨になるというのである。また阿膠については、沈括『夢溪筆談』にも、

東阿亦濟水所經、取井水煮膠、謂之阿膠。用攪濁水則清。人服之、下膈、疏痰、止吐。（卷三・辯證）
というように、東阿膠縣の井戸水で膠を煮たものをいい、阿膠自體も痰の除去と咳止めになった。

また、三國魏の韋誕（字、仲將）以降、墨に混入するようになった麝香にも藥効があつて、醫者が麝香・當門子・枳枸で重症の過食過飲症を治した例が伝えられる。

眉山有楊穎臣者、……忽得消渴疾、口飲水數斛、食倍常而數溺。服消渴藥逾年、疾日甚、……蜀有良醫張玄隱之子、不記其名。爲診脈、笑曰、君幾誤死矣。取麝香・當門子、以酒濡之、作十許丸。取枳枸子爲湯、飲之、遂愈。問其

故。張生言、……今診穎臣、脾脈熱而腎且衰、當由菓實・酒過度、虛熱在脾、故飲食兼人、而多飲水。……麝香能敗酒、瓜菓近輒不實、而枳枸亦能勝酒。……〔蘇軾文集（中華書局・中國古典文學基本叢書、以下同様）卷七三雜記「枳枸湯」〕

右によれば、麝香には酒類・瓜菓を斷つ働きがあったわけである。また、宋・莊綽『鷄肋編』にも、醫者が墨を服用させ重症の血行障害を治した例を傳えている。

王彥若墨經云、趙韓王從太祖至洛、行故宮、見架間一篋、取視之、皆李氏父子所製墨也。因盡以賜王。後王之子婦蓐中血運危甚、醫求古墨爲藥、因取一枚、投烈火中、研末酒服即愈。諸子欲各備產乳之用、乃盡取墨煨而分之。自是李氏墨世益少得云。（卷下）

この場合は、固形墨を焼いて粉末にし、酒で服用した例であるが、その効果を目の當たりにした諸子も残りを分け合、産後授乳期の障害に備えたといっている。また、次の記事には、薬を混入した墨の服用をいう醫者の言がみえる。

山谷道人（黃庭堅）云、潘生（谷）一日過、余取所藏墨示之。谷隔錦囊探之、曰、此李承晏輒劑、今不易得。又揣一、曰、此谷二十年造者、今精力不及、無此墨也。取視果然。其小握子墨、醫者云、可入藥用、亦藉其眞氣之力也。¹⁸

（明・麻三衡『墨志』權質第八）

これらによれば、宋代には墨の成分の薬効を熟知する士人が少なくなかったと察せられる。

墨成分の薬効については、もとより李時珍の『本草綱目』に詳しく、出血、難産、逆子、腫瘍、下痢、白癬等々、効能のある疾病名とともに、温水や金などと混ぜての服用や、焼いて粉末にしたうえで服用、さらには濃く磨って塗布する仕方など、さまざまな處方が記されている。いまその一々については省略するが、集解に

宗爽曰、墨松之煙也。世有以粟草灰爲者、不可用。須松煙墨、方可入藥。惟遠煙細者爲佳、粗者不可用。今高麗

國每貢墨於中國、不知何物、合不宜入藥。鄜延有石油、其煙甚濃、其煤可爲墨、黑光如漆、不可入藥。というように、薬用は松煙墨用の極細の煤でなければならなかった。そしてその極細の煤は、また佳墨の要件でもあったのである。

また、松を焼いて取る松煙には、當然、松脂の成分も混在する。その松脂自體も、周知のように古くから仙薬と信じられていた。松脂を常食とした伏生（劉向『列仙傳』）や、道士を目撃して以來、松脂・茯苓を服して仙となり、赤松子に改姓した黄初平（葛洪『神仙傳』）らのおり、古來、松脂は長壽の妙薬とされた。蘇軾も「記松」に、

松之有利於世者甚博。松花・脂・茯苓、服之皆長生。……其明爲燭、其煙爲墨。〔曲洧舊聞〕卷五

といい、松脂を松花・茯苓同様の長壽薬と認めている¹⁹。しかも、滕・蘇・呂所飲の墨が「眞松の煤の遠煙」を使用した佳墨であったと傳えていた蘇軾も、薬用でも眞松（眞定の松）の脂がよいとし、老化の豫防に効く松脂の服用法を詳述している（『蘇軾文集』卷七三雜記「服松脂法」）。

右にみてきたように、宋では、佳墨製造用も飲墨用も、同じ最上級の松煙が求められた。このことからすれば、嗜好の飲墨行爲には、墨の薬効に導かれた側面があったと考えられる。

2、薬としての飲墨は普及したか

清・趙烈文の光緒一三年（一八八七）一二月の日記（『能靜居日記』）に、墨の服用記事がみえる。

初八日庚寅、陰。是日子刻、季俞睡醒、大欬血滿盃。余夜起、揀方藥、磨陳墨一盞、飲之得止。

初十日壬辰、晴。是日丑刻、季俞復欲吐血、忍之而止。復飲墨汁一小盞。晨起吐小許、幸不劇。

夜中に吐血した季俞のために、陳墨を磨って盃一杯を飲ませたとところ治まり、その二日後にも、吐血が危ぶまれ、墨汁

を盃で飲ませたところ、朝方には幾分ましになった、というのである。このような記述からも、また、すでにみたとおり墨の藥効を解する士人が少なくなかったことからしても、藥としての墨の服用は、廣く行われたようにも想像されるのであるが、事實は以下にのべるとおり、それに反するようである。

趙烈文が季俞に飲ますため磨墨したのは「陳墨」であった。陳墨とは、

司馬溫公嘗曰、茶與墨政相反。茶欲白、墨欲黑。茶欲重、墨欲輕。茶欲新、墨欲陳。（蘇軾『東坡題跋』卷五「記溫公論茶墨」）

とみえるように、長期間ねかせた固形墨、すなわち古墨のことである。先にみた血行障害治癒の記事に「醫 古墨を求めて藥と爲す」とあった古墨に同じである。また、これら醫療行爲とは別に、東北地方には、子供の喉に引かかった魚の骨を墨汁を使って除く巫術もある。澄んだ水を碗に注ぎ、筆か指に墨汁をつけて水面に「龍」字を書いて飲ませる、というのがそれであるが、その墨汁も「長年保存した」ものであるという。⁽²⁰⁾ すなわち、「藥用には古墨」といった社會通念があったのである。

何戡氏「關於墨」（『藝文叢輯』第十一編所收）には、蘇軾の「（呂行甫）時に磨して之を小啜す」の記事を引いた後に、自身の體驗を次のように記している。

這可以使我們知道好些事。「磨而小啜之」的事果然有趣。不過除了呂君，同好恐怕少了。我也曾經去到大墨莊買過墨，指明要舊些的，那夥友就問我是不是吃的，當時我的確大吃一驚，以爲此公也是呂行甫之徒。我非書家固矣，不過小啜而弄得一嘴烏黑，卻也無此雅興，後來才知道他是指的郎中所開的方子裏所用而言。這也只好怪我見聞太陋，墨據說是可以滋陰補腎的哩，……

陳墨を買った際、「是不是吃的」と問われたというのである。當時は呂行甫と嗜好を同じくする輩がいることに驚いた

が、その後、薬としての服用を問われたのだと氣付き、自身の陋見淺識を恨んだといっている。かれの薬事知識がどの程度であったか、という問題を残しはするが、かれがただちに墨の薬用を連想しえなかったことは、薬としての墨の服用が一般的でなかった可能性をうかがわせる。墨の薬効が廣く信じられながら、墨の服用が一般に行われていなかったとすれば、その理由はなにか。

清・錢泳『履園叢話』に次の記述がある。

昔人有云、筆陳如草、墨陳如寶。所謂陳者、欲其多隔幾年、稍脫火性耳、未必指唐・宋之墨始爲陳也。今人言古墨者、輒曰李廷珪・潘谷、否則程君房・方于魯、甚至有每一笏直數十百金者、其實皆無所用。……（卷二 藝能類「製

墨」）

墨の陳なるは寶の如しとはいうが、陳墨は多年寝かせた固形墨であればよく、唐墨・宋墨である必要はないのに、今では、唐の李廷珪、宋の潘谷、さもなければ明の程君房・方于魯らの墨を指すようになって、価格は時に一笏數十百金に昇ることもある、というのである。また、何戡氏が「關於墨」に引く「凌君の記」によれば、上品の墨がさほど大振りでないのは、値が張るからで、乾隆・嘉慶の最も高價なものは毎斤銀四十五兩、明墨の場合は安物でも百兩を越える⁽²¹⁾という。さらに、謝德萍・孫敦秀氏の『文房四寶縱橫談』（一九九〇）には、同仁堂薬店珍藏の墨、すなわち薬用の墨は、「罕見の明墨」であると傳えている⁽²²⁾。この同仁堂の事實は、薬用墨が高額の古墨であることの證にはかならない。

さらにいえば、固形墨には薬店が薬用に供すべく墨工に製造を委託した墨、いわゆる「薬墨」の類がある。周紹良氏の『清墨談叢』（二〇〇〇）には、その薬墨の形状について、次のようにいっている。

……亦有薬店委托墨肆代製者、經目所及、曾見有『京都同仁堂』款及『育寧堂』款。篋中所存一笏（同仁堂薬墨），方柱形，大不盈寸（圖版の拓は、36×10×7mm。不盈寸というから、さらに小さい）、……『同元堂』無考、當是

乾、嘉時代北京藥店。……（三三九 同元堂藥墨）

・此墨（康熙八年製 京同仁堂藥墨）視一般藥墨爲大（原寸は不明。圖版の拓は75×23×10㎞），形勢亦異，豈當時藥墨形式如此耶。（三四〇 京同仁堂藥墨）

これによれば、藥墨は一般に小型であることになる。藥墨が小型であるのも、藥になる陳墨が高額との通念の反映であらう。

このように、藥効が信じられる陳墨は、社會通念では唐墨・宋墨・明墨といったきわめて高額な古墨であった。藥としての飲墨が普及しなかつたとすれば、その通念が普及を阻んだためであらう。⁽²³⁾

先述のとおり、明末清初の飲墨記述にはリアリティに不足する嫌いがあった。その理由を、「飲墨」の語の流行に求めるとすると、なぜ飲墨が觀念化し、文人の漫語に轉じたのか。

宋人においては、筆に含ませる佳墨も服用する藥用墨も同じであった。もちろん、兩者に共通の煤は松煙の最高級品であるから、高額ではあったが、先述のように實際の飲墨が、嗜好と醫療の兩面で認められ、嗜好的飲墨にも藥用意識が潜んでいた。しかし、明末清初では、藥用墨は骨董的價值を持つ高額な古墨という通念が形成されつつあったために、愛墨趣味が普及した反面、藥用意識が薄らぎはじめたのではないか。そして、嗜好と藥用のこのような分離が、飲墨の非現實化を進め、飲墨を觀念的にした一因ではないか。

墨と文字

實際に飲墨しないまでも、飲墨の意志を表明、あるいは飲墨の意義を口にした士人は少なくない。その一部を挙げれば、以下のとおりである。

ア……文辭雖少作、勉強非天稟。既得旋廢忘、懶惰今十稔。麻衣如再著、墨水眞可飲。每聞科詔下、白汗如流瀦。……
〔蘇軾詩集〕卷八「監試呈諸試官」詩

イ……楊君爲己學、度越流輩百。坐捫故衣蝨、垢襪卷汗黑。睥睨紈褲兒、可飲三斗墨。〔黃庭堅「山谷詩集」卷一四「次韻楊明叔見餞十首」第三首〕

右は宋人の例である。アでは、科擧試の監督官に任用された蘇軾が、「自分は文章を書いてはきたが、文才がない。しかも十年も離れていたのだから、墨汁を飲まなければ」と詠んだもの。また、イは、黄庭堅がその門人楊明叔（皓）を、「ボロ服のシラミをとり、垢と汗の染み付いた靴下をつける楊明叔は、上等な袴姿の坊ちゃんらを横目で睨み、墨汁を三斗飲ませねばという」と詠んだものである。つまり、飲墨は文藻・文思を補う手段であった。

ウ……方凱（潘膺祉）能用墨而工于墨、故超然獨盡其理。又舉其法以示方來、托諸副墨之子。彼或稱、昔言善易者不論易。讀方凱墨序、當罰飲墨水一斗矣。〔顧起元「潘方凱墨序」〕

エ……晴窓洗胃還吞墨、永日撐腸欲煮書。……〔錢謙益「牧齋初學集」卷七「答書硯」詩〕

右は明末清初の例である。ウは明の潘膺祉の製墨を稱えるための『潘方凱墨評』に収録される序で、今の愛墨家の嗜墨・嗅墨・賈墨・相墨・聽墨・瘞墨の態度を批判した直後の一段である。「易を善くする者は易を論ぜず」とは、『三國志』魏書本傳、裴松之注引「管輅別傳」にみえる管輅の言で、何晏の要請で九事を論じた際、「易に精通した君が、易中の辭義に及んでいないのはどうしてか」の鄧颺の問に答え、鄧颺に「要言は煩わしからず」といわしめた言である。²⁴すなわち、講釋に達者で墨の何たるかを知らない今人は、墨汁一斗を飲むべきだといっているのであるから、飲墨は慧眼を呼び覺ます手段である。エの「洗胃」は、「嘗て其の胃腸を刮り、西江の水を以て之を滌ふを夢み」て、「文思益ます進んだ王仁裕の故事（『五代史』本傳）を踏まえるであろう。つまり、飲墨は文思を發揚する手段である。

才……所嗟暗劍投、蛇蚓空天闕。胸無一寸書、甘受飲墨罰。況今老且衰、腕彊不得屈。署款列賤名、徒爲墨君輓。

無以酬主人、五字慚惡札。……（汪節庵製〈萬杵（桐華）膏〉墨に附された墨票にみえる梁同書題詩（嘉慶七年）。周紹

良氏『蓄墨小言』No.100「梁同書墨」引）

力程君（瑤田）文筆工無比、姿媚何嘗解俗書。累壓篋中爲長物、不妨啜汁賞心餘。（姚鼐『惜抱軒詩集』卷七「論墨絕句九首」第七首）

キ……遂皆以余不工楷、余亦不求工。偶極意書之、見者或以爲工、而余不耐也。嘗作詩自嘲曰、我書濫劣不堪識、

固宜飽飲一升墨。」（許宗衡『玉井山館筆記』）

クス賓塞爾譏其本國考官發策試人之非法、曰、吾嘗聞一律師言、嘗見考試律學題紙、設以問彼、必將飲墨。（孫寶瑄『忘山廬日記』光緒二十九年九月二一日）。

右は清人の例である。オも、飲墨が胸中の書籍すなわち讀書の氣を補うとする。カでは、文筆の工さにおいて比類なき程瑤田には、墨は篋中の長物、飲墨も賞心の一對象にすぎないというのであるから、凡人にとっては、飲墨は文筆の工をもたらず手段である。キでは、飲墨を書法上達の手段としている。クは、社會學者スペンサーが批判した英國試験事情を、出題者でさえ解けない難題で、出題者も「將に墨を飲まんとす」るものであると紹介している。つまり、飲墨が學識を補う手段であったからである。

このように、飲墨は文思・文藻・學識・慧眼の補充あるいは覺醒、また書法技能の向上をもたらずと語り繼がれてきた。これが、墨汁を愛飲しないまでも、士人が多く飲墨の意志や意義を口にした理由にはかならない。では、なぜ飲墨がそのような意味を有するにいたったのか。そもそも墨は文字（文思）そのものであったからである。

晉・王嘉『拾遺記』に、

壺中有墨汁如淳漆。灑地及石、皆成篆隸科斗之字。(卷三「周靈王」)

とみえる話は、墨の滴が作る形が文字を連想させることからみて、墨と文字との密接な関係を神秘的に結合させた早期の思考であったろう。同様に、墨と文字との神秘的結合を示す著名なものに、晋・葛洪『神仙傳』にみえる班孟の「嚼墨噴紙」、すなわち、

班孟者、不知何許人。……又能吞墨、舒紙著前、嚼墨噴之、皆成文字、滿紙各有意義。

がある。一方、胸中の墨、すなわち飲んだ墨と文字との神秘的結合も、すでに劉宋・劉敬叔『異苑』中にみえる。

鄭玄思學數年、無一業成。夜夢老人鑿開玄心、傾墨汁着玄心内、遂通達。

墨汁を胸中に注がれる夢を見て學問が成就した、というのである。これは、胸中の墨と文字との結合をいう點で、飲墨の發想に直接する。先にみた北齊の策問時における飲墨一升の罰を併せみれば、晋から南北朝の間には、胸中の墨が文字に化すると考えられるようになったといえるであろう。そして、人と墨との接觸のしかたや、墨が人にもたらす作用の内容は、その後、時とともに多様化したと思われる。たとえば、

臨川王右軍墨池、每貢士之歲、或見墨汁點滴、如潑出水面、則必有登第者。(『古今圖書集成』第一五一卷引『復齋漫錄』)

では、人は墨の滴を池の水面に目撃したにすぎないし、墨との接觸から生じる作用は登第者の出現で完結する。また、

唐伯虎(寅)嘗夢人惠墨一囊・龍劑千金、由是詞翰繪素擅名一時。因構夢墨亭。(方瑞生『墨海』卷一藩餘五輯所收)

では、墨との接觸は固形墨を惠まれる夢であり、その作用は文名・畫名の獲得で完結する。しかし、いかに變化したにせよ、人が墨から受ける作用は、畢竟、文字(文思)の範疇を脱しない。そのことはまた、以下に列する例にも明らかである。

ア風枝雨葉脊土竹、龍蹲虎踞蒼鮮石。東坡老人翰林公、醉時吐出胸中墨。(黃庭堅『山谷詩集』卷一五「題子瞻畫竹石」)

詩)

イ老寛胸次無墨汁、經營慘淡寒生須。秦川名古壯哉、況復玉立千尺孤。安得晨光滿東壁、試看龍燭崑崙墟。……

(元・劉因『靜修先生集』卷四「范寬雪山」詩)

ウ畫工胸次墨汁滿、那得水壺貯秋月。(金・元好問『遺山詩集』卷五「下黃榆嶺」詩)

エ士大夫胸中無三斗墨、何以運管城。然恐蘊釀宿陳、出之無光澤耳。(明・陸樹聲『清暑筆談』)

アの「醉時に吐出す胸中の墨」は噴墨ではなく、宋・任淵『山谷詩註』に「胸中の墨は、其の藻翰の餘を謂ふ。退之の張籍に代はるの書(『韓昌黎文集』卷三「代張籍與李浙東書」)に曰く、一たび胸中の奇を吐き出さんや」というように、墨は文思に他ならない。イも、范寬の畫いた雪山に對する「經營慘淡 寒さ須に生ず」る感想から、「老寛 胸次 墨汁無きや」と詠んだのであるから、墨は作畫時の構想や心境である。ウも、畫工の胸にはそもそも墨汁が満ちているわけであるから、イに同じ。エも、胸中の墨がなければ、士人は運筆できなくなるのであるから、作詩作文の素。要するに各例とも、胸中の墨を文字(文思)の範疇で解している。このように、墨は文字(文思)そのものであったから、次の各例にみえるように、胸中の墨の有無は當然、辯の品(オ)、諛の格(カ)、學識(キ)、識字力(ク)も左右する。

オ有某公子最刻薄、在河南節署、胸無墨水而善於罵人。(錢泳『履園叢話』卷一七「報應」刻薄)

カ旗友有好諛者、然胸無墨汁、語多惡劣。(陳恆慶『諫書稀庵筆記』惡諛)

キ此事(篆刻)須略弄碑帖、講求三代兩漢文字、再加以胸中書卷流溢其間、是爲上乘。譬之包人作采、離不了雞汁・

火腿汁。碑帖・書卷即雞與火腿也。弟胸無點墨、今生不望其成。……(『吳昌碩尺牘信片合刊』(書研)所收尺牘 一

九九九、P.8)

ク陳繼達、本武夫、不知書。夢人以墨水升餘飲之、即能識字。(明・方瑞生『墨海』卷一藩餘一輯所收「玉海」)(註12參

照)

以上のように、墨は文字(文思)であるとの観念は、古くから一貫して變わることがなかった。飲墨提唱の論理は、こうした観念に立脚していたのである。

結びに代えて——王勃はなにを呑んだ

初唐の王勃の故事「腹稿」を伝える文献では、次の唐・段成式『酉陽雜俎』の記事(全文)がもっとも古い。

王勃每爲碑頌、先磨墨數升、引被覆面而臥、忽起、一筆書之、初不竄點。時人謂之腹稿。少夢人遺以丸墨盈袖。

(前集卷一二・語資)

腹稿のこの記事は、宋の『太平廣記』採録の『談藪』においても、次のとおりほぼ同文である。

唐王勃每爲碑頌、先磨墨數升、引被覆面而臥、忽起、一筆書之、初不點竄。時人謂之腹稿。(卷一九八)

ところが、宋代になった『新唐書』の王勃傳では、次のように「先墨磨(磨墨)升」と「引被覆面而臥」との間に、「則酣飲」の三字を挿入している。

勃屬文、初不精思、先磨墨數升、則酣飲、引被覆面臥、及寤、援筆成篇、不易一字。時人謂勃爲腹稿。

「則酣飲」三字がある理由や経緯は、明らかでないが、三字のある記述は『新唐書』だけでなく、次に挙げる宋・孔傳『續(白孔)六帖』、元・辛文房『唐才子傳』にもみられる。

・腹稿。王勃屬文、初不精思、先磨墨數升、則酣飲、引被覆面臥、及寤、援筆成篇、不易一字。時人謂勃爲腹稿。

(『續六帖』卷一四)

・勃屬文綺麗、請者甚多、金帛盈積、心織而衣、筆耕而食。然不甚精思、先磨墨數升、則酣飲、引被覆面臥、及寤、

援筆成篇、不易一字。人謂之腹稿。(『唐才子傳』卷一)

宋代以後の書すべてが、王勃の腹稿を「則酣飲」三字を加えて傳えているのではない。たとえば、北宋末・計有功『唐詩紀事』、南宋・祝穆『古今事文類聚別集』には、

・勃爲文、先磨墨數升、引被覆面而臥、忽起書之、初不加點。時謂腹稿。(『唐詩紀事』卷七)

・王勃每作碑頌、先磨墨數升、引被覆面而臥、忽起、一筆書之文不加點。時人謂之腹稿。(『古今事文類聚別集』卷五)

とあるように、文に若干の異同があるものの、『酉陽雜俎』の記述を襲っている。しかし、宋以後は、王勃の腹稿を「則酣飲」を加えた内容で理解したものが少なくないのも事實である。

では、「則酣飲」三字のある内容で、王勃の腹稿の故事に接した場合、なにを「酣飲」と解したか。詩文を作るに先んじて酒を飲んだ事例は、事缺かない。杜甫の「李白一斗詩百篇」(飲中八仙歌)もそうだが、唐の胡楚賓は、執筆前にきまって飲酒したし、皇甫湜は持ち歸った一斗の酒の半分を飲んで、一眠りしたのち、酔いに乗じて碑文を書き上げた。⁽²⁶⁾ また、五代の楊凝式が碑の代筆を李翰に頼んだときは、李翰が酒を酣飲するのを俟って代筆させ、一晚で一萬五千字がなったし、⁽²⁷⁾ 實際、宋・王讜『唐語林』は、何に據ったか明かでないが、次のとおり

王勃凡欲作文、先令磨墨數升、飲酒數盃、以被覆面而寢。既寤、援筆而成、文不加點。時人謂爲腹稿也。(卷二「文學」)

「酒を飲むこと數盃」と明記する。「則酣飲」の内容は、酣の原義からみても飲酒と解釋するのは、一見穩當であるようだが、飲酒と解するのは決して普遍的でなかった。そればかりか、飲墨と解する傾向も少なからず認められる。たとえば、宋・吳子良『林下偶談』では、「飲墨」の題のもとに「胸中に墨無し」の説や北齊の飲墨罰の故事とともに、王勃の腹稿の故事を擧げて、

俚俗謂不能文者、爲胸中無墨、蓋亦有據。通典載北齊策秀才、書有濫劣者、飲墨一升。∴唐王勃屬文、初不精思、先磨墨汁數升、酣飲、引被覆面臥、及寤、援筆成篇、不改一字。人謂勃爲腹稿。(宋・吳子良『林下偶談』卷一「飲墨」)と記している。清・褚人穫『堅瓠續集』も、同様に「飲墨」の題のもとに、腹稿の故事を列して、

梁試進士不中程者、飲墨水一斗。北齊策秀才、書有濫劣者、飲墨一斗。∴王勃每屬文、先磨墨汁數升、酣飲、引被覆面而臥、及寤、援筆成篇、不改一字。人謂勃爲腹稿。(卷一「飲墨」)

と記し、明・徐樹丕『識小錄』にいたっては、次のとおり墨汁を飲んだと明記する。

王勃作文、初不精思、但飲墨汁數升、引被覆面臥、醒則援筆成篇、不改一字。(卷一「山谷語」)

王勃が酣飲したのは墨汁であるとの解に左袒して、「王勃 碑頌を爲る毎に、先づ墨 數升を磨り、則ち酣飲し、被を引きて面を覆ひて臥し、忽ち起き、一筆にして之を書し、初より竄點せず」の記述を讀めば、酒よりも墨汁の方が説得力がある。

王勃は墨を數升磨って、「則ち酣飲し」たのであるから、酣飲したのは磨ったばかりの墨汁であるのが自然。しかも、酒は腹中で文字に變わる保證はないが、墨なら腹中で文字に變わる。胸中の墨は文字(文思)にはかならないからである。さらに、墨を數升(唐では一升=600ml)磨ったが、「碑頌」の長文ではあれ、數升もの量はいらぬ。しかも、王勃は一字も書き改めることなく書き上げたのであるから、墨の無駄使いはなかった。數升も磨ったのは飲む分を含むからである。北齊の飲墨罰は「一升」、梁でも「一斗」とあるように、磨った半分ほどは飲墨のためである。段成式の『酉陽雜俎』にも、最後に「少きとき人の遺るに丸墨を以てし袖に盈たすを夢む」と添えているのは、王勃の文藻が墨から生じたことの證である。——といった論理が存在したことになる。このことは、とくに嗜好の飲墨がなされた宋以降、飲墨經驗の有無に関わらず、墨がもつ神秘性と飲墨の意味とを、文人が斟酌していた證にはかならない。

附記…本稿は、平成十四年度漢學會春期大會における、中國文學科一、二年次生を対象とする講演内容をもとに起草したものである。講演後、岡田脩教授より教示をいただいた。記して感謝申し上げます。(二〇〇二・九・六)

註

- (1) 北齊正旦會、侍中黃門郎宣詔、勞諸郡上計。勞訖、命遺紙、陳事宜。字有脫誤者、呼起席。書迹濫劣者、令飲墨水一升。文理孟浪者、奪容刀及席。
- (2) 北齊朝會儀、諸郡守勞訖、遣陳土宜。字有脫誤及書迹濫劣者、必令飲墨水一升。見開寶通禮。
- (3) 『北堂書鈔』卷一三三「席」には、「不通輒奪」と題して同文の謝氏『後漢書』を引く。
- (4) 『稗海』本『東坡志林』には、「初不假二物也」六字がある。
- (5) 中田勇次郎氏が「文房清玩史考」ほかで指摘しているように、歐陽詢『藝文類聚』には墨の條を缺く。眞世南『北堂書鈔』、徐堅『初學記』には紙筆硯墨の各條がみられるが、墨をより詳細に論じようになったのは、北宋初めの蘇易簡『文房四譜』からである。
- (6) 昭陵晚歲開內宴、蓋數與大臣侍從從容談笑、嘗親御飛白書以分賜、……更且以香藥名墨徧賚焉。一大臣得李超墨、而君謨伯父(蔡襄)所得乃廷珪(李廷珪)。君謨時覺大臣意歎有不足色、因密語、能易之乎。大臣者但知廷珪爲貴而不知有超也。旣易、轉欣然。及宴罷、騎從出內門去。……(蔡條『鐵圍山叢談』卷五)
- (7) 余蓄墨數百挺。暇日輒出品試之、……(蘇軾『東坡題跋』卷五「書墨」)
- (8) 李公擇(常)見墨輒奪、相知閒抄取殆遍。(蘇軾『東坡題跋』卷五「書李公擇墨蔽」)
- (9) 司馬君實(光)無所嗜好、獨畜墨數百爾。或以爲言君實曰、吾欲子孫知吾所用、此物何爲也。達道之畜書、其亦司馬之墨癖也。(釋德洪『石門題跋』卷二「跋達道所蓄伶子于文」)
- (10) 先伯祖中大夫、平生好墨成癖、如李庭珪・張遇以下皆有之。……晚年擇取尤精者、作兩小篋、常置臥榻、愛護甚至。(陸游『老學庵筆記』卷二)
- (11) 近時士大夫多造墨、墨工亦盡其技。然皆不逮張(遇)・李(廷珪)古劑、獨二谷(張遇の子で李氏の墨法を繼いだ張谷、および潘谷)亂眞……。 (蘇軾『東坡題跋』卷五「書李承晏墨」)。此墨吾在海南親作。其墨與廷珪不相下。……(同右、卷五「書海

南墨)

- (12) 明・方瑞生『墨海』(卷一藩餘一輯)や明・陳繼儒『珍珠船』に「陳繼達、本武夫、不知書、夢人以墨水升餘飲之、即能識字」の記事がみえる。『墨海』には、末に「玉海」と注するが、王應麟『玉海』中に未檢出。
- (13) 拙稿「許友の生歿年——周亮工『賴古堂集』による——」(群馬大學語文學會「語學と文學」第二九號 一九九三) 参照。
- (14) 『西坡類稿』卷四四筠廊偶筆下に「黃州洗墨池蛙口食墨而黑。其說見楚故。老友張長人爲予具說之如此」とみえる。
- (15) 徐康『前塵夢影錄』卷上に「張長人仁熙有墨癖、藏古墨三十六品、著雪堂墨品。後盡歸之宋漫堂(榮)。宋與之同嗜、亦得三十六品。著漫堂墨品、與筠廊偶筆・二筆・怪石贊、同付手民」とみえる。
- (16) 『太平御覽』卷九八八には、「東水經言曰、東阿膠縣有大井。其巨若輪、深六十丈。歲常煮膠、以貢天府。本草所謂阿膠也」ともみえる。
- (17) 宋・晁貫之『墨經』藥に「凡墨藥尙矣。魏韋仲將用眞珠・麝香二物。……」
- (18) 邵博『邵氏見聞後錄』卷二八には、黃庭堅と潘谷とのやり取りを伝える酷似の文があるが、小握墨についての醫者の談は見えない。
- (19) ただし、紀昀は『閔徵草堂筆記』卷一九に、松脂の服用で腸閉塞を引き起こした事例を擧げて、服用の非を論じる。
- (20) 張紫農著、伊藤清司・堀田洋子譯『中國の巫術』。「澄んだ水を一碗と長年保存した墨汁を用意し」(2 巫術による外傷治療) P.161) とある。ただし、墨汁の状態で長期保存したものではないように思われる。
- (21) 至於凌君記云：墨之上乘每丸決不甚重，因一等墨索價極昂。乾嘉最貴者每斤銀四十五兩，若巨至五六，當買二三百兩。明代物價縱低，亦當踰百。如此鉅值、絕難銷售。
- (22) 如北京同仁堂藥店的細料庫中至今仍珍藏着幾十塊罕見的明墨。(p.117)
- (23) 子供の喉に刺さった魚の骨を除去する巫術に使用された墨汁も「長年保存した」ものであったのは、恐らく藥用墨は古墨という通念が、巫術の世界にも及んだからであろうが、當然、巫術においては巫の力量に期待が寄せられるのであって、墨の藥効自体に直接期待が寄せられるわけではない。したがって、この巫術の場合、恐らく高額の藥用墨を必要としなかったであろうし、使用量もきわめて微量であるために、經費上の問題がなかったと思われる。
- (24) 輅爲何晏所請、果共論易九事、九事皆明。晏曰、君論陰陽、此世無雙。時鄧颺與晏共坐、颺言、君見謂善易、而語初不及易中辭義、何故也。輅尋聲答之曰、夫善易者不論易也。晏含笑而讚之可謂要言不煩也。

- (25) 胡楚賓屬文敏速、每飲酒半酣而後操筆。(『太平廣記』卷一七四引『譚賓錄』)
- (26) 唐·高彥休『闕史』卷上に「……則請斗釀而歸、至家、獨飲其半、寢酣數刻、嘔噦而興、乘醉揮毫、黃絹立就」
- (27) 宋·陶嶽『五代史補』卷三に「李瀚有逸才、每作文則筆不停輟、而性嗜酒。楊凝式嘗受詔撰錢鏐碑、自以作不逮瀚。於是多市美酒、召瀚飲、俟其酣、且使代筆。經宿而成。凡一萬五千字、莫不詞理典瞻。……」